

大阪フロイデニュース

Freude

vol. 13-13 2019.11.13. wed

おのれに注意!
おのれに注意!
おのれに注意!

大阪フロイデ合唱団 Tel 06-6358-2626
〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-18-4B
ホームページ <http://www.osakafreude.com>
メールアドレス info@osakafreude.com

11月	3日	日	13:15	小田北生涯学習プラザ	日曜練習
	6日	水	18:30	堀江アルテ	
	13日	水	18:30	堀江アルテ	← 分かれ練習
	20日	水	18:30	堀江アルテ	← 分かれ練習
	27日	水	18:30	此花区民ホール	← 分かれ練習
12月	4日	水	18:30	堀江アルテ	
	8日	日	13:15	小田北生涯学習プラザ	日曜練習
	11日	水	18:30	堀江アルテ	
	18日	水	18:30	堀江アルテ	
	25日	水	18:30	此花区民ホール	分かれ練習
1月	1日	水		休み	
	8日	水	18:30	堀江アルテ	
	15日	水	18:30	堀江アルテ	
	18日	土	13:15	小田北生涯学習プラザ	強化練習
	19日	日	13:15	小田北生涯学習プラザ	強化練習
	22日	水	18:30	小田北生涯学習プラザ	
	29日	水	18:30	港区民センター	
2月	5日	水	18:30	堀江アルテ	
	12日	水	18:30	堀江アルテ	
	16日	日	13:15	港区民センター	日曜練習
	19日	水	18:30	小田北生涯学習プラザ	
	26日	水	18:30	小田北生涯学習プラザ	
3月	4日	水	18:30	天王寺区民センター	
	11日	水	18:30	天王寺区民センター	
	15日	日	13:15	大淀コミュニティセンター	日曜練習
	18日	水	18:30	天王寺区民センター	
	25日	水	18:30	天王寺区民センター	
4月	1日	水	18:30	天王寺区民センター	
	8日	水	18:30	天王寺区民センター	
	12日	日	13:15	大淀コミュニティセンター	日曜練習
	13日	月		都島区民センター	オケ合せ
	15日	水		ゲネ&本番 いずみホール	ゲネ+本番

会場全部決まりました

2019.11.13
会場は
近付いた
2021
のせい!

「ハイドンとモーツァルトのこと、知っておこう」（ネットつまみぐいゴメン）シリーズ

国本静三「ハイドンの生涯」

<少年時代>

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン Haydn (1732-1809) は、ハンガリー王国領との国境にあるニーダーエスターライヒ州ローラウ村に生まれた。幼い頃から音楽に才能を発揮し、6歳の時に親戚の家に送られ、音楽の勉強を始める。

1740年、ウィーンの聖シュテファン大聖堂聖歌隊監督ゲオルク・フォン・ロイター Georg von Reutter に才能を認められ、ウィーンに移った。大聖堂聖歌隊員として9年間在籍することになる(1740-49年)。ここでの務めは大聖堂はじめ他の教会のミサでの奉仕、皇帝や貴族の宮廷で催される音楽会や宮廷行事にも出演した。シェーブルン宮殿での聖霊降臨の祭日(大祝日)で歌った時、ハイドンが建築の足場に登って騒いだという逸話が伝わっている。かのマリア・テレジア皇后に直々に厳しく叱責されたとか。このテレジアは後にかのモーツァルトをお膝にのせて抱っこした方だが、ハイドンの一つの個性を示す一挿話と考えるとよいかも。またウィーンの他の学校で演じられたラテン語劇に歌手として出演することもあった。

聖歌隊員は6名と定められ、聖歌隊監督ロイターの下でカペルハウスで共同生活をした。少年隊員たちにはカトリック教理、ラテン語、一般学校の教科が教えられた。これに加えて音楽教育が加わる。それは歌唱をはじめオルガン、チェンバロ、ヴァイオリンの演奏を学んだ。2名の専属の音楽教師がいた。ただ作曲については特別の教育は無かったが、ハイドンに多くのものを与えた9年間であった。

1745年の秋、弟ヨハン・ミハエル・ハイドン Johann Michael Haydn (1737-1806) もこの聖歌隊に加入してくる(この弟ミハエルは1755年まで務めた)。まもなく兄ヨーゼフは変声期を迎えたため、この独唱者の地位を兄に代わって得た。兄ヨーゼフにはこの独唱者の役割が無くなった。この時期のハイドンの衝撃や複雑な思いが推し量られる。特に将来に対する不安は、計り知れないものであったであろう。

☞

1749年、ハイドンは定職を見つからないまま、聖歌隊をやめることになる。これから後の10年間は、彼の音楽能力に磨きかける時期となった。この期間におけるウィーンでのハイドンについての資料は欠けている。しかし、この年から堰を切ったように意欲的に、しかも本格的に作曲を開始していった。それは次のような作品群が物語っている。

「ミサ・プレヴィス へ長調 Hob.22-1」(1749年?頃作曲)、「クラヴィア・ソナタ 八長調 Hob.16-1」(1750~55年?頃作曲)、「オルガン協奏曲八長調 Hob.18-1」(1756年?頃作曲)、そして初めての多数の「弦楽四重奏曲 Hob.3-1~4、Hob.2-6、Hob.3-6」(1757~59年?頃作曲、6曲)などが続く。この頃から徐々に作曲家としての評判を得ていった。

